

戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響 (前號續)

京都帝國大學醫學部島園内科

戸出軍兵

二、總括的觀察

余ガ検査ヲ行ヘル患者ハ前記八十例ニシテ、脈搏ニ對シテハ増加スルモノ及減少スルモノ血壓ニ對シテハ増加スルモノ及減少スルモノト初メ増加シテ直ニ減少スルモノ竝ニ増加シテ漸次減少シ復歸スルモノトアリ。之ヲ表示スレバ左ノ如シ。

第八十四表

番號	氏名	性	診斷	脈搏數增減	最高血壓昇降 (耗)	脈壓增減	呼吸數增減	體溫增減	蒼白	排便感	溫感	其他
一	谷口	女	ホタリー氏管開存	增 四(五)分	增 六(五)分	減 五			+	+	++	發汗
二	稻垣	女	心臟瓣膜病	增 四(二)〇	減 一八(二)〇	減 一		增(〇・四)度	卅	-	卅	惡心
三	高橋	男	同	增 四(一)〇	減 一三(三)〇		減	增(〇・一)	卅	+	+	不整脈
四	吉岡	男	同	減 二(二)五	減 一〇(五)	減 二	減	減(〇・一)	卅	+	+	不整脈
五	吉村	男	同	增 六(二)五	增 一八(五)	減 二	〇	增(〇・三)	卅	+	-	不整脈
六	山本	女	同	減 一〇(五)	增 一(五)	減 一	減	〇	卅	-	++	腹痛
七	吉村	男	慢性心筋炎	減 一四(五)	增 二〇(五)	增 七	減	增(〇・二)	卅	-	++	
八	大林	男	心外膜炎	減 四(一)五	減 一七(六)〇	減 一〇	〇	增(〇・二)	卅	-	+	不整脈
九	田中	女	甲狀腺腫	增 四(五)	減 八(一)〇	增 一六	〇	〇	+	-	+	
一〇	荒井	男	巴塞ドウ氏病	減 四(〇)五	減 一五(三)〇	減 二四	增	減(〇・二)	卅	+	++	同 發汗 盜汗 睡眠感 呼吸 不整

戸出—腦下垂體製劑カ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	
山口	津梅	永瀬	早川	大澤	藤井	加藤	今村	木佐	大林	三浦	富永	戸出	原田	小林	竹森	宮田	坂本	富久	河瀬	松村	
男	男	男	男	男	女	男	男	男	男	女	男	男	女	男	女	男	男	女	男	女	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	脚氣	リボヂエストロフィー	尿崩症	同	同	同	糖尿	同	同	
減一〇(四〇)	減一四(五五)	減二二(二五)	減一〇(五)	增二(二〇)	增八(五)	減八(一五)	減一〇(五)	增八(一五)	減四(二五)	增八(二〇)	減一〇(一〇)	減二一(六〇)	增二〇(〇五)	增二四(二五)	增二六(一〇)	減二二(四五)	減六(五)	減二二(四〇)	減一四(五)	增二二(五〇)	減三〇(二五)
增三三(五)	增九(五)	增五(五)	增六(五)	增九(五)	減八(五〇)	減一〇(四五)	增一五(五)	增五(五)	增七(五)	增一(五)	增七(一〇)	減二二(五五)	增一九(四五)	增一(五)	減二二(三〇)	增三(五)	增二(五)	減一四(四〇)	增八(五)	增七(五)	增一九(五)
增二九	減一四	減二	減二	增五	減一七	減一四	減一	減七	減一	增七	減一六	減七	減二	增一〇	減一六	減六	減一三	減一	減九	增九	
〇	〇	減	增	減	〇	增	〇	增	〇			〇	增	〇	〇	增	〇	減	減	減	
〇	減(〇・二)	減(〇・七)	〇	增(〇・二)	增(〇・三)	增(〇・三)	減(〇・二)	增(〇・五)	〇			減(〇・三)	減(〇・四)			〇	〇	〇	減(〇・三)	減(〇・四)	減(〇・三)
卅	卅	+	卅	+	+	+	卅	卅	+	+	卅	卅	+	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅	卅
-	+	卅	卅	-	-	-	卅	卅	-	+	+	-	+	-	-	卅	卅	-	+	-	卅
+	-	-	卅	卅	-	卅	-	-	-	+	+	卅	卅	-	-	卅	+	-	卅	+	卅
不整脈	腹痛	催眠感等	呼吸不整	惡心等	頭痛等	發汗等	排尿感	惡心頭痛等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等	發汗等

六七九

戸出—腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一
佐治	木村	森田	岡田	高本	上畑	青木	北門	北村	藤井	畑田	和田	古谷	山縣	馬場	津田	横野	清水	藤江	松井	田邊	上房	
男	男	女	男	女	男	男	男	男	男	男	男	男	女	男	男	男	男	男	男	男	男	男
萎縮腎	同	同	同	同	貧血	白血病	同	十二指腸潰瘍	過酸症	胃痛	過酸症	胃潰瘍	同	結核性肋腹膜炎	同	同	氣管枝喘息	同	同	同	同	脚氣
增	增	減	減	減	減	減	增	減	增	減	減	減	增	減	減	減	減	減	減	減	減	減
四(一〇)	八(五)	六(三〇)	六(五)	六(二〇)	六(四〇)	六(四五)	四(二〇)	八(五)	六(二〇)	四(一〇)	一〇(三五)	八(五)	八(一〇)	二〇(三五)	二(三〇)	八(五)	八(二〇)	六(五)	一〇(一〇)	二〇(三五)	六(一〇)	六(一〇)
減	增	增	增	增	增	增	減	增	增	減	減	增	增	增	增	減	增	增	增	增	增	增
一九(二五)	一〇(五)	二(五)	三(二〇)	三(一〇)	三(一〇)	七(二〇)	三一(六〇)	一七(五)	二(五)	一四(五〇)	一(五五)	一〇(三五)	七(一五)	七(五)	九(五)	一五(三〇)	四(一〇)	六(一〇)	一八(五)	一(五)	三(四一五)	四(一五)
增	增	增	增	增	增	減	減	減	減	減	減	增	增	增	減	減	減	增	減	增	增	增
八	二〇	三	二〇	二〇	一三	六	三一	一	八	一一	一一	一六	三	七	九	九	一二	一七	一	六	二二	二二
〇	增	減	〇	〇	〇	增	〇	減	增	減	減	〇	〇	〇	〇	減	〇	〇	〇	〇	〇	〇
增(〇・三)	一	減(〇・八)	〇	〇	增(〇・三)	增(〇・四)	〇	減(〇・二)	增(〇・二)	增(〇・三)	減(〇・二)	〇	〇	〇	〇	增(〇・二)	增(〇・四)	〇	〇	〇	〇	〇
+	++	+	++	+	+	++	+	++	+	+	+	+	++	++	++	++	+	+	++	+	+	++
+	++	++	++	-	-	++	+	++	-	-	-	+	+	++	++	+	-	-	+	-	+	++
+	-	+	-	-	-	-	+	+	+	-	-	+	++	++	++	+	+	-	+	+	+	+
	惡心	腹痛		呼吸不整	腹痛	排尿感等		眩暈		催眠感等		發汗等	頭痛等	發汗	渴		頭痛		心悸兀進等		發汗等	排尿感

戸出—腦下垂體製劑カ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	
宮川	古川	中辻	吉田	北村	吉田	中廣	井川	南方	後藤	山内	木澤	小谷	北脇	横田	岩佐	尾崎	吉行	岡田	奥村	宮本	山田	
男	女	男	女	男	男	男	女	男	男	男	男	男	男	女	男	女	男	男	女	男	女	
頭震麻痺	腦徽毒	腦出血	同	同	脊髄癆	脊髄膜腫瘍	同	脊髄徽毒	脊髄前角炎	同	進行性筋萎縮	書胱炎	膀胱炎	多胞性腎囊腫	腎臟徽毒	同	同	同	同	同	慢性腎炎	同
減一六(一五)	減八(一五)	減六(三五)	減二〇(三五)	減一四(二五)	減二(一五)	增一八(三〇)	減六(五五)	增六(一〇)	減二六(六〇)	增六(一〇)	減八(一五)	減一〇(一五)	增一八(一五)	減一四(一〇)	減四(一五)	減二二(三〇)	減六(一五)	減六(一五)	減一〇(三〇)	減一〇(三〇)	減一四(三〇)	減八(三五)
減二三(二五)	增九(一五)	減二〇(三〇)	增一九(一五)	增二(一五)	增九(一五)	增一四(一五)	減一(二〇)	減二〇(四五)	增二六(一五)	減三一(三五)	增二九(一五)	增五(一五)	增四(一五)	減二〇(四五)	增三〇(一五)	減二〇(四〇)	減二二(四〇)	增六(一五)	減二〇(二〇)	減一〇(二〇)	減二四(三五)	增八(一五)
減二二	減四	減八	減一三	減一三	減五	增一四	減四	減八	增一八	減一八	增一八	減一八	減一	減一〇	增一〇	增五	減一三	增九	增一	減一	減二	增一五
			增	增	〇	減	增			減	減		增		減	增	〇	〇	〇	增	增	
		增(〇・三)	〇		減(〇・三)	〇	增(〇・六)	減(〇・四)			減(〇・二)	增(〇・五)	〇		〇	〇	〇	〇	〇			
+	卅	卅	卅	+	卅	卅	+	卅	卅	卅	卅	卅	卅	+	卅	卅	卅	卅	卅	+	+	-
-	卅	-	卅	卅	-	卅	-	卅	+	卅	-	卅	卅	-	+	卅	卅	卅	卅	-	+	+
-	卅	-	卅	+	-	-	-	+	+	-	卅	卅	卅	-	+	-	-	+	-	+	+	+
	排尿感	睡眠	呼吸不整		排尿感		腹痛	排尿感	發汗	呼吸不整	排尿感		催眠感	頭痛	發汗	蠕動等	排尿感					頭痛等

六八一

スル時不整脈ノ起レルヲ實驗セリ。クロツツ等ハ動物ニ於テ「ピツイトリン」ヲ注射スレバ一時性呼吸停止ヲ見タルガ人間ニ於テハ不整呼吸トナリテ出現ス。余ハ十例一二・五%ニ之ヲ觀察シ一例ノ腦出血患者ノ如キハ呼吸停止セル爲不安ヲ感ゼシメタル事スラアリ。呼吸ハ注射後ヤ、深クナリ、時々深呼吸ヲ發ス。訴ヘニ依レバ感冒又ハ肺炎ニ罹レル時ノ如ク促迫ノ感ヲ來スト云フ。溫感ハ五十四例六七・五%ニ之ヲ認メ不愉快ナラズ寧ロ愉快ニ感ズル場合多ク、數時間持續スルコトアリ。發汗ヲ來セルモノ十四例一七・五%ヲ算シ、多クハ背部大腿手掌等ニ來ル。催眠感ヲ八例一〇・〇%ニ見一例ノ腦出血ニ於テハ深く睡眠シ強キ刺戟ヲナスニ非ンバ覺醒セズ、患者ノモノヲ心配セシメタリ。頭痛ヲ來セルモノハ、九例一一・二%ニシテ腦神經疾患ニ特異ナラズ、且腦脊髓壓高キモノガ必ズ頭痛ヲ來セルト云フコトナシ。クツシング Cushing⁽²²⁾ 等ハ動物ニ於テ腦脊髓壓ヲ昇騰セシムルヲ實驗シ蓮井氏ハ之ヲ人體ニ於テ著シキ昇騰作用ノ存在スル事ヲ確證セリ。注射後ニ來ル頭痛ハ一ハ腦血管ノ縮小ト一ハ腦脊髓壓ノ昇騰トニ歸スルヲ至當トセンカ。一例ノ「リポヂストロファイ」ニ於テ著明ナル顫震ヲ見タリ。顫震ハ手指最モ劇シク、全身ニ及ビ振動數ハ一分百以上ヲ算シ振幅比較的大ナリキ。腱反射ノ強ク亢進セルモノハ之ヲ弱ムルコトアリ。輕度ノ足現症等ハ消失スルニ至ル。シユミットハ「アドレナリン」注射ニ因リ減弱セル腱反射ガ一過性ニ亢進スルコトヲ述ベ、吳博士⁽²⁴⁾モ同様ノ所見ヲ發表セリ。「ピツイトリン」ガ之ト反對ノ作用ヲ現ハスコトハ注目スベキコトナリ。瞳孔ニ對シテ一例ノバセドウ氏病ニ稍散大セルヲ見タル他反應全ク無ク、皮膚蒼白ハ結膜ニモ及ブコトアリ。呼吸數ハ増加セルモノ十九例、減少セルモノ十九例、變化ナキモノ二十八例ナリキ。不整呼吸ヲ發スルモノハ概シテ呼吸數減少シ胸内苦悶ヲ發スルモノハ増加スル如シ。一般ニ氣管枝喘息ニ之ヲ用ヒ氣管枝ノ充血ヲ去ルガ故ニ呼吸ヲ安靜トナスト云ハレ喘息發作ニ應用セラル、モ、余ハ四例ノ喘息發作ニ用ヒタルニ、一例ヤ、苦痛減少セル外ハ一時間ノ後ニ「アドレナリン」ノ注射ヲ餘儀ナクセシメタリ。體溫ニ關シテハクツシングハ體溫調節ニ腦下垂體前葉ノ必要ナルヲ説キ橋本氏⁽²⁵⁾ハ腦下垂體後葉ヲ重要ナル關係アルヲ證明シ、其他フライシユマン、デーブリン、Fleischmann u. Döblin

戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

六八四

ハ正常動物ノ體溫ハ腦下垂體越幾斯及其後葉越幾斯ニ依ツテ下降セシメラレ、且「アドレナリン」食鹽及溫刺ニ因スル發熱ヲ抑制スト説キ、パウエル又體溫下降作用ヲ證明セリ。橋本氏ハ強力ナル發熱劑「テトラヒドロ、ベータナフチラミン」ノ作用ヲモ全ク抑制シ、正常動物ニ注射スレバ常ニ下降ヲ、又常溫以下ニセシメタル動物ニ於テハ之ニ反シテ一・五乃至二・五度ノ昇騰ヲ實驗セリ。然レ共臟器越幾斯ハ常ニ蛋白及其分解產物ヲ含有スルガ故ニ之ヲ注射スル時ハ、異種蛋白ノ爲ニ體溫ニ變動ヲ來ササルカ。橋本氏ハ正常動物ニ全腦越幾斯ヲ注射スルモ、毫モ體溫ハ上昇セズ、時トシテ輕度ノ下降ヲ見ルコトアリト謂ヘリ。余ガ人體ニ於テ注意シテ測定セル成績ニ因レバ、六十三例中下降セルハ十五名、上昇セルハ二十一名、不變ナルモノ二十五名ナリキ。一例ノバセドウ氏病ニ於テ始メハ下降セルニカ、ハラズ「レントゲン」療法ヲ施シタルニ次回ハ反ツテ上昇セルモノアリ。一例ノ癩癩患者ニテ始メ上昇ヲ見タルニ腸「チフス」經過後ニ檢査セル時ハ反ツテ下降ヲ來セルアリ。即不變ナルモノ最モ多ク上昇下降セルモノハ共ニ多クハ、〇・二乃至〇・三度以內ニシテ著明ナラズ唯三例ニ於テ注射後十分乃至二十五分ニシテ〇・五、〇・七、〇・八度ノ下降ヲ來セリ。其内一例ハ結核性腹膜炎ニシテ熱發アリシモノナリ。之ヲ要スルニ人間ニ於テハ「ピツイトリン」注射ニヨリ體溫ニ變化ナキ事多ク、多少増減アルモ著明ナラズ。時トシテ明カニ下降ヲ認ムルモ、特種ノ疾病ト一定ノ關係ヲ見ズ。

第八十五表

症	狀	陽性ノ人員	陽性ノ百分率(%)
蒼	白	七八	九八・七
排	便	五一	六三・七
腸	蠕	三	三・七
	動		

「ピツイトリン」ハ脈搏ヲ緩徐ナラシムル物質ナルニ、反ツテ之ニ増加ヲ見ルコトアリ。余ハ八十例中二十三例ニ脈搏ノ増加ヲ認メタルモ、一分間五以下ノ差ハ確實ヲ缺ク恐レアルヲ以テ省略シ、五以上ノ増加ヲ以テ眞ノ逆反應トスレバ一六例ニ存在シタリ。

戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

吾人特ニ興味ヲ有スルコトハ、脈搏及血壓ニ對スル逆反應ト認ムベキ例ヲ多數ニ實驗シタルコトナリ。

(一) 脈搏ニ及ス影響竝ニ逆反應

頭	頭	催	發	溫	不	不	心	唾	排	腹	惡
					整	整	悸	液	尿		
		眠			呼		亢	分	泌		
			汗	感	吸	脈	進	增	加	感	痛
震	痛	感									心
一	九	八	一四	五四	一〇	七	四	三	九	六	四
一・二	一一・二	一〇・〇	一七・五	六七・五	一二・五	八・七	五・〇	三・七	一一・二	七・五	五・〇

第八十六表

症例番號	氏名	病名	注射前脈搏數	注射五分後脈搏數	注射後脈搏最增加數及其時	脈搏增加數
二	稻垣	僧帽瓣狹窄及不全閉鎖三尖瓣不全閉鎖症	五六	六〇	七〇(二〇分)	一四
五	吉村	僧帽瓣不全閉鎖	四二	四四	四八(二五分)	六
一二	河瀬	バセドウ氏病	六二	五六	八四(五〇分)	二二
一七	小林	尿管崩症	六四	七四	八〇(一〇分)	一六
一八	原田	「リボヂストロフィー」	七二	七二	九六(二〇分)	二四
二一	三浦	脚氣	七二	九二	九二(五分)	二〇
二三	木佐	脚氣	六四	七〇	八〇(二〇分)	八
二六	藤井	脚氣	九二	六六	七二(一〇分)	八
四〇	山縣	結核性肋膜炎	六四	一〇〇	一〇〇(五分)	八
四四	藤井	過酸症	六四	六六	七二(一〇分)	八
五二	木村	十二指腸蟲病	五二	五四	五八(二〇分)	六
六二	北脇	膀胱炎	六四	七二	七二(五分)	八
六五	山内	進行性筋萎縮	六八	八〇	八六(一五分)	一八
六七	南方	進行性筋萎縮	七八	七二	八四(一〇分)	六
六九	中廣	脊髄膜腫瘍	八二	八二	八八(一〇分)	六
七八	上中	脊髄膜腫瘍	八〇	七〇	九八(三〇分)	一八
七八	上中	進行性麻痺	六四	六六	七〇(二五分)	六

以上十六例ヲ觀察スルニ三例ヲ除クノ外ハ皆原發性脈搏増加ニシテ注射後五分ニ於テハ増加ノ割合少ナク、十乃至三十五分ノ間ニ最高ニ達シ之ヨリ注射前ノ數ニ復歸スルカ或ハ一時間後ニ於テモ注射前ヨリ多キモノアリ。

「ピツイトリン」注射ノ際ニ於ケル脈搏減少ノ成因ニ就テハ、心筋及血管ニ對スル作用、自律神經ニ及ス影響ノ外、腦脊髄液分泌促進ニ因ル腦壓ノ増加モ考慮セザルベカラズ。余ノ試験ノ結果ニテハ脈數減少ハ一分間二乃至四十二ニシテ、特種ノ疾患、自律神經緊張ノ状態等ノ間ニ特別ノ關係ヲ見ルコトヲ得ズ。

逆反應ノ際ハ恐ラク心筋及血管ノ「ピツイトリン」ニ適應セザル状態ニアル際起スト考ヘ得ベシ。然レ共「アドレナリン」ニ於ケルガ如ク心臟疾患、バセドウ氏病、脚氣等ニ限リテ起ルニアラザレバ何カ他ニ原因ヲ有スルモノナラン。余ノ實驗セル十六例ニ於テ之ヲ見ルニ、心臟ニ變化ヲ有スル疾患及自律神經系統ニ異常アルモノヲ除外スレバ著シク羸瘦セルモノ又ハ著シキ神經質ノ患者ナリキ。

(二) 血壓ニ及ス影響竝ニ逆反應

最高血壓ニ對シテハ、注射後上昇スルモノ、初メ上昇シ後下降スルモノ、初メヨリ下降スルモノトアリ。上昇ハ四乃至三十五耗水銀柱ニシテ注射後五乃至十分ニシテ最高ニ達スルモノ多シ。八十例中増加セルモノ五十二例、他ノ二十八例ニハ八耗以上ノ下降ヲ示セリ。其内十六例ニ於テ原發性下降ヲ、十二例ニ於テ續發性下降ヲ認メタリ。原發性下降ニ於テハ漸次下降シテ極度ニ達シ數時間ノ後ニ復歸シ、續發性下降ニ於テハ先五分後ニ上昇シ、後急激ニ下降シテ極度ニ達シ然後復歸スルヲ知ル。一般ニハ二十乃至六十分ニシテ最低ニ達ス。

最低血壓ハ「アドレナリン」ト異ナリ、注射後五分ニテ急激ニ上昇スルモノ多シ。而シテ迅速ニ復歸スルモ、時ニ上昇ノマ、長ク續クモノアリ。八十例中減少セルモノ十七例ヲ算スルモ、最高血壓ノ昇降トハ必ズシモ一致セズ。最高血壓下降スルニモカ、ハラズ最低血壓ハ却ツテ上昇スルコト多シ。又最高血壓ノ上昇ニ比シテ最低血壓上昇ノ著明ナルモノ多ク、最高血壓下降スルニモ拘ラズ最低血壓上昇スルモノアルヲ以テ脈壓ハ一般ニ著明ニ減少シ増加ハ二十九例ニ見タリ。此脈壓減少ト共ニ脈搏小トナル事多シ。之「ピツイトリン」ガ直接血管收縮ヲ起ス爲ニシテ「アドレナリン」注射時ニ於ケル所見ト比較スレバ興味深シ。

戸出—腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第八十七表

症例番號	氏名	病名	注射前血壓耗	注射後五分 血壓耗	注射後血壓最 下降耗及其時	血壓下降耗
二	稻垣	僧帽瓣狹窄不全閉鎖三尖瓣不全閉鎖	一三八	一四八	一二〇(二〇分)	一八
三	高橋	大動脈瓣狹窄及不全閉鎖	一三六	一四一	一二三(三〇分)	一三
四	吉岡	僧帽瓣不全閉鎖	一四七	一三七	一三七(五分)	一〇
八	大林	心外膜炎	一三七	一三四	一二〇(六〇分)	一七
九	田中	甲狀腺腫	一〇四	一〇八	九六(一〇分)	八
一〇	荒井	バセドウ氏病	一三二	一三四	一一六(五〇分)	一六
一四	坂本	糖尿尿病	一四三	一四六	一二八(三〇分)	一五
一七	小林	尿管尿崩症	一一六	一一三	一〇二(四〇分)	一四
一九	戸出	脚氣	一三〇	一三〇	一一八(三〇分)	一二
二五	加藤	脚氣	一一二	一一八	一一〇(五五分)	一二
二六	藤井	脚氣	一一一	一一六	一一一(四五分)	一〇
二七	橫野	氣管枝喘息	一一六	一二四	一〇八(五〇分)	八
三七	和野	氣管枝喘息	一一三	一一〇	一〇八(三〇分)	一五
四二	和田	胃酸過多症	一一四	一一四	一〇三(五五分)	一一
四三	畑田	胃幽門癌	一一二	一一八	一〇八(五〇分)	一四
四六	北門	十二指腸潰瘍	一四七	一三五	一一六(六〇分)	三一
五三	佐治	萎縮腎	二〇一	二〇八	一八二(二五分)	一九
五五	宮本	慢性腎炎	一五五	一四五	一三一(三五分)	二四

「ピツイトリン」ニ見ル血壓逆反應ハ脈搏ニ於ケルト同様ニ特殊ノ疾患或ハ特殊ノ状態ニ之ヲ認ムルコト能ハズ。今此理由ヲ考按スルニ、大動脈ニ於ケル血壓ハ心臟ノ能力ト血管ノ抵抗トニ關スルヤ論ヲ俟タズ。心臟ノ「エネルギー」ハ收縮期ノ壓力ト輸血量トニヨリテ確定セラレ、血管ノ抵抗ハ弾力性收縮状態、血量、血液ノ性質等ニヨリテ支配セラル。即心臟ノ收縮強キカ又ハ血管ノ收縮スル時ハ、血壓ハ亢進ス。此ノ如ク血壓ハ種々ノ状態ニ依ツテ左右セラル、モノナレバ、其變化ニ就テモ此等ノ事ヲ顧慮セザル可カラズ。「ピツイトリン」ニ依ル最高血壓ノ上昇ハ心筋ニ作用シテ其收縮ヲ強盛トシ、血管ニ作用シテ之ヲ縮小セシムルニ基因ス。故ニ「ピツイトリン」ニヨリテ最高血壓ト共ニ最低血壓モ上昇シ而モ最低血壓ノ上昇ハ最高血壓上昇ヨリモ著明ナル理ナリ。而シテ注射後脈搏著シク小トナルハ心臟ヨリモ血管ニ作用スルカノ大ナル事ヲ示スモノナラン。余ノ經驗セル二十八例ノ逆反應者中、心

戸出「腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

七九	七六	七五	七三	六八	六七	六五	六一	五九	五八	五六
新居	堀江	宮川	中辻	井川	南方	山内	横田	尾崎	吉行	奥村
進行性麻痺	癩瘤(腸「チフス」經過直後)	顫震麻痺	腦出血	脊髓敵毒	脊髓敵毒	進行性筋萎縮	多胞性腎囊腫	慢性腎炎	慢性腎炎	慢性腎炎
一二八	一三〇	一七〇	一五八	一二三	一一三	一二一	一四〇	一〇九	一六〇	一一七
一二二	一三八	一九〇	一五六	一一九	一一四	一一〇	一四〇	一一〇	一六八	一二〇
一一七(三〇分)	一一八(五〇分)	一五七(二五分)	一四八(三〇分)	一一二(二〇分)	一〇三(四五分)	九〇(三五分)	一三〇(四五分)	九九(四〇分)	一三八(四〇分)	一〇七(二〇分)
一一	一二	一三	一〇	一一	一〇	三一	一〇	一〇	二二	一〇

戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

臟病、脚氣、腎臟病ニ比較的多ク之ヲ認め且心臟病ニ於テハ機能障礙ナキモノハ多ク血壓上昇シ、障礙著シキモノニ於テ其下降ヲ示シ又萎縮腎等ニテ血壓ノ高キモノニ逆反應ヲ認メタリ。一例ノ癲癇ニ於テ腸「チフス」經過後ニハ逆反應ヲ呈セルハ注意スベキコトナリ。

パール等ハ始メヨリ血壓ノ低キ場合、或ハ實驗的ニ刺絡ヲ行ヘル時等ニ血壓下降ヲ認メタルモ、余ハ血壓低キ場合、又ハ著シキ貧血ニ際シテモ皆血壓ノ上昇ヲ認め下降セルヲ見ザリキ。然レ共心臟及血管ニ異常ヲ認メザル患者ニ於テモ亦逆反應ヲ來スコト少ナカラザルヲ以テ、之ヲ「ピツイトリン」ニ對スル心筋及血管反應ノ異常ノミヲ以テ説明スルコト能ハズ。

(三) 「ピツイトリン」反應ト「アドレナリン」反應トノ比較

一九一四年セバイ Cepai⁽²⁷⁾ハ内分泌臟器系統疾患ニ對スル官能的診斷法トシテ「アドレナリン」及「ピツイトリン」ヲ眼ニ點滴シテ其貧血持續時間竝ニ程度ヲ測定シタリ。而シテ「アドレナリン」眼結膜反應ノ強陽性ナル場合ハ「ピツイトリン」反應ハ無キカ又ハ弱クシテ「クロームアフィネ」系統ノ機能減弱アリ。反之「ピツイトリン」眼結膜反應ノ強陽性ナル時ハ「アドレナリン」反應ハ無キカ又ハ弱クシテ「クロームアフィネ」系統ノ機能亢進アリト結論セリ。然ルニ酒井氏等ハセバイ氏反應ハ一定ノ範圍ニ限ラル、モノニシテ價值甚ダ少ナシト論ゼリ。余ハ同一ノ患者ニ就テ「アドレナリン」及「ピツイトリン」ヲ別々ニ皮下ニ注射シ九名ニ就テ其反應ヲ比較シタリ。

第八十八表

症例番號	氏名	脈搏ノ増減	血壓ノ増減	自覺症狀
一〇	荒井 A P	減 四二 增 三五	減 一六 增 五六	蒼白溫感排便感發汗呼吸及脈搏不整睡眠感(+) 顫震蒼白心悸亢進糖尿蒼白(卅)

戸出—腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

ニ弱ク反應スルカ又ハ逆反應ヲ起スモノハ「アドレナリン」ニ依リ弱ク又ハ逆反應ヲ起スガ如シ。

反之血壓ニ於テハ第十例第十七例第五十三例ニ於ケルガ如ク「ピツイトリン」ニ逆反應ヲ起スモノハ「アドレナリン」ニ依ツテ強ク反應シ、第二十八例第四十一例ノ如ク「アドレナリン」ニ逆反應ヲ呈スルモノハ「ピツイトリン」ニハ正規反應ヲ示セリ。

其他八例ノ者ニ「ピツイトリン」反應ト「ピロカルピン」反應トヲ比較シ、他ノ八例ニ就テ「アトロピン」反應ト比較セルモ一定ノ關係ヲ認ムルコト能ハズ。

三、尿ニ及ス影響

既ニ述ベタル如ク「ピツイトリン」ハ尿量増加ヲ來サシムルモノト認メラル、モ一派ノ學者フエルデン⁽²⁸⁾ウンベル、レーメル Velden, Umber, Röhmer 等ハ利尿阻害說ヲ建ツルニ至レリ。フエルデンハ健康者ニ「ピツイトリン」ヲ注射スル時ハ尿量ノ減退ヲ來シ殊ニ尿崩症患者ニ之ヲ注射スレバ著シク其減少ヲ來スト稱ス。尙ホ「ピツイトリン」ハ新陳代謝ニ影響ヲ及シ血糖ヲ高メ、糖尿ヲ出サシメ窒素ノ排泄ヲ増加セシム。クツシング等ハ腦下垂體ヲ摘出セル家兔ニ於テ「アドレナリン」糖尿ハ常ニ缺損スレ共、「ピツイトリン」ヲ用ヒテ後「アドレナリン」ヲ注射スレバ糖尿ヲ來スコトヲ實驗セリ。

第八十九表

症例番號	氏名	注射前			注射後一時間			注射後二時間			注射後三時間		
		尿量	糖	蛋白	尿量	糖	蛋白	尿量	糖	蛋白	尿量	糖	蛋白
八	大 林	一一〇	-	-	一三〇	-	+	六〇	-	+	四五	-	+
七	吉 村	二〇	-	-	八〇	-	+	四〇	-	+	-	-	-
五	吉 村	一〇〇	-	-	五〇	-	+	六〇	-	-	七〇	-	+

戸出—腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

五三	五〇	四八	四六	四五	四四	四三	三六	三四	三三	三二	三一	二七	二三	二二	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇
佐治	岡田	上畑	北門	北村	藤井	畑田	清水	松井	田邊	上房	山口	大澤	木佐	大林	大原田	宮本	坂久	富瀬	河村	松井	荒井
四〇	五五	一八〇	一八五	一〇〇	八〇	一〇〇	一二〇	一〇〇	六〇	二五〇	二〇〇	六〇	五五	二五〇	九六	一三〇	五〇	一五	五〇	一〇〇	一〇〇
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-
八五	五〇	七〇	三五	九五	一二〇	一〇	八〇	一二〇	二〇	一一〇	四〇五	八〇	六〇	一八〇	四〇	七三	三五	二五	六〇	三〇〇	三〇〇
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	+	+	-	+
四五	四五	七五	二五	四五	三〇	一〇	六〇	一〇〇	四五	四〇	九〇	一〇〇	八〇	一一〇	四〇	五〇	四二	二〇	三五	五〇	五〇
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2% +	-	-	+	+	-	-
+	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	+	-	-
六九三					二五	二〇				二三	一〇五		八五		六〇	五〇	三〇	二五	二〇	二〇	一〇〇
					-	-				-	-		-		食後時 +	-	+	+	-	-	-
					-	-				-	+		-		-	-	-	+	-	-	-

五六	奧村	八〇	+	六〇	三〇	+		
五七	岡田	五〇	+	七五	三五	+	二五	
六四	木澤	一五〇	-	八五	四五	-		+
六八	井川	一五〇	-	二〇	二〇	-		
七〇	前田	一五〇	-	一〇	一三五	+		
七二	吉田	六五	-	四三	三〇	-		
七七	四方	一〇〇	+	一七五	二〇	+		
七九	新居	四〇	-	一〇〇	四〇	+		
八〇	浦	五〇	-	一三〇	五五	+		

本表ニハ早朝空腹時ニ於ケル試験ノミ擧ゲタリ。

注射前糖尿ヲ認メズシテ注射後之ヲ證明セルモノ二例ナリキ。一例ハバセドウ氏病ニ於テ一例ハ「リボヂストロ
 フイー」ナリ。「リボヂストロフイー」患者ノ耐糖力ハ大ナリシニ「ピツイトリン」注射ニ依リ大量ノ糖ヲ見出シタル
 ハ余ノ不思議トスル所ナリ。糖尿病ニテ朝食前糖尿ノ無キモノハ第十五例ニ見ル如ク注射後ト雖モ食餌ヲ與ヘザレ
 バ糖尿ヲ發見セザリキ。注射前蛋白ノ證明セラレザリシ者ニ於テ「ピツイトリン」注射後蛋白ヲ見出セルモノ往々ア
 リ。此表ニ掲グルモノ三十四例中九名ニ見タル外、他ノ例ニ於テモ屢之ヲ見タリ。程度ハ極メテ微弱ニシテ精細ニ
 検査セザレバ見逃ス位ナリ。蛋白尿ハ「ピツイトリン」ニ依ル腎臟刺戟ノ爲ニアラザルカ。フランチニー Franchini⁽²⁹⁾
 ハ之ヲ家兎及「モルモット」ニ注射シ腸ニ潰瘍ヲ腎臟ニ出血ヲ見タリ。

四、白血球ニ及ボス影響

フアルタ等ノ犬ニ於ケル實驗ニヨレバ、「ピツイトリン」ヲ注射スル時ハ白血球ハ増加ス。其際單核細胞ノ増加ヲ

戸出ノ腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第九十表

白血球種類	時間			
	注射前	注射後三十分	一時間	二時間
白血球數	八〇〇〇	八二〇〇	五八〇〇	七二〇〇
%				
小淋巴球	二七・二	二八・五	二七・七	二六・三
大淋巴球	四・五	四・六	六・一	二・六
大單核細胞	三・六	三・八	二・二	三・九
移行型	一・八	一・〇	一・一	一・九
中性多核白血球	五八・四	五七・八	五八・二	六〇・八
「エオザン」細胞	四・五	四・二	四・八	四・二
「AST」細胞	〇	一・〇	〇	〇・四

第十九表

白血球種類	時間			
	注射前	注射後三十分	一時間	二時間
白血球數	五三〇〇	四六〇〇	四二〇〇	四八〇〇
%				
小淋巴球	二六・四	三三・〇	二六・六	二四・三
大淋巴球	五・二	五・七	三・二	五・二
大單核細胞	一・九	一・九	一・一	一・三
移行型	一・四	二・二	〇・八	一・二
中性多核白血球	六四・二	五八・八	六八・二	六七・八
「エオザン」細胞	〇・九	一・五	二・〇	二・〇
「AST」細胞	一・〇	〇	〇	一・〇

六九五

第一例 谷口 波特リー氏管開存

來シ中性嗜好白血球及「エオザン」嗜好白血球ヲ減少スルモ後、中性嗜好白血球ハ復歸シ、「エオザン」嗜好白血球ハ消失シ終ニハ Neutrophile aneosinophile Leucocytose ヲ來スト云フ。然レ共氏等ハ之ヲ人類ニ用ヒテ變化ヲ發見スル能ハザリキ。多クノ學者ハ「ピツイトリン」ハ自律神經ノ緊張ヲ高メ白血球像ハ單核細胞及「エオザン」嗜好白血球ノ増加ヲ來ストスルモフアルタ等以後詳細ニ検査セル論文ヲ見ズ。

次ニ示ス試験ハ悉ク早朝空腹時ニ採血ジ、トーマ、ツアイス血球計算器ヲ用ヒ、染色標本ハメー、ギームザ氏法、白血球ハ千以上ヲ數ヘタリ、検査ハ注射前、注射後三十分、一時間、二時間ト施行シ、時ニ一時間半又ハ三時間ヲモ行ヘリ。

第二例 稻垣

僧帽瓣狹窄不全閉鎖
三尖瓣不全閉鎖

戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第八例 大林 肋膜炎竝ニ心外膜炎

表二十九第

白血球種類	時間	白血球數			
		注射前	注射後	一時間	二時間
白血球	數	5560	5680	5680	6300
小淋巴球	數	336	260	270	290
大淋巴球	數	42	37	37	26
大單核細胞	數	23	21	24	26
移行型	數	17	19	12	20
中性多核白血球	數	500	66	67	65
「エオザン」細胞	數	70	74	67	74
「ヤスト」細胞	數	0	0	0	0

第十例 荒井 バセドウ氏病

表三十九第

白血球種類	時間	白血球數			
		注射前	注射後	一時間	二時間
白血球	數	8300	8500	8400	9900
小淋巴球	數	277	319	336	333
大淋巴球	數	33	28	29	31
大單核細胞	數	25	30	30	14
移行型	數	16	19	21	14
中性多核白血球	數	575	67	65	56
「エオザン」細胞	數	74	83	78	61
「ヤスト」細胞	數	0	0	0	0

第十一例 松村 バセドウ氏病

表四十九第

白血球種類	時間	白血球數			
		注射前	注射後	一時間	二時間
白血球	數	7800	10000	9000	13300
小淋巴球	數	237	262	240	233
大淋巴球	數	30	31	33	17
大單核細胞	數	53	52	36	36
移行型	數	31	45	22	32
中性多核白血球	數	738	70	63	67
「エオザン」細胞	數	10	0	0	0
「ヤスト」細胞	數	0	0	0	0

第十二例 河瀬 バセドウ氏病

表五十九第

白血球種類	時間	白血球數			
		注射前	注射後	一時間	二時間
白血球	數	4000	4000	6000	8600
小淋巴球	數	335	272	256	263
大淋巴球	數	58	64	44	37
大單核細胞	數	61	66	64	69
移行型	數	27	35	30	35
中性多核白血球	數	487	50	54	59
「エオザン」細胞	數	40	31	43	33
「ヤスト」細胞	數	0	0	0	0

第十三例 富久 糖尿病

表六十九第

白血球種類	時	間	
		注射前	注射後
白血球數		五八〇	五八〇
小淋巴球		二九・七%	三〇・九%
大淋巴球		四・〇	四・六
大單核細胞		一・四	二・〇
移行型		二・〇	一・四
中性多核白血球		六・三	五九・〇
「エオザン」細胞		二・三	二・二
「マスト」細胞		〇・三	〇
一時間		五四〇	二六・六%
二時間		五九〇	二九・二%

第十八例 原田 「リポチストフィー」

表七十九第

白血球種類	時	間	
		注射前	注射後
白血球數		六八〇	一三六〇
小淋巴球		三三・二%	二四・九%
大淋巴球		三・四	二・八
大單核細胞		二・三	二・五
移行型		一・四	一・八
中性多核白血球		六・八	五九・八
「エオザン」細胞		七・八	七・九
「マスト」細胞		〇・三	〇・三
一時間		二二六〇	二〇・〇%
二時間		二六八〇	一五・九%

注射後三十分ニ於テチエルク氏刺戟型セチヲ見タリ。
戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第十九例 戸出 健康

表八十九第

白血球種類	時	間	
		注射前	注射後
白血球數		五七六〇	七〇〇〇
小淋巴球		二六・七%	三三・八%
大淋巴球		四・七	六・四
大單核細胞		二・五	一・六
移行型		二・〇	一・〇
中性多核白血球		六・二	五五・四
「エオザン」細胞		二・六	五・三
「マスト」細胞		〇・四	〇・八
一時間		六五二〇	三三・四%
二時間		七五六〇	二四・四%

第二十二例 大林 脚氣

表九十九第

白血球種類	時	間	
		注射前	注射後
白血球數		五七六〇	一五四〇
小淋巴球		四〇・四%	三八・〇%
大淋巴球		八・四	六・五
大單核細胞		二・一	二・三
移行型		一・八	一・五
中性多核白血球		三・三	三七・三
「エオザン」細胞		一四・九	一四・四
「マスト」細胞		一・〇	〇
一時間		六〇八〇	三五・二%
二時間		六四四〇	三一・五%

六九七

戸出―腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第二十五例 加藤 脚氣

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	700
小淋巴球	注射後	1000
大淋巴球	一時間	640
大單核細胞	二時間	750
移行型		
中性多核白血球		
「エオチン」細胞		
「AST」細胞		

表 百 第

第二十八例 早川 脚氣

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	630
小淋巴球	注射後	600
大淋巴球	一時間	660
大單核細胞	二時間	700
移行型		
中性多核白血球		
「エオチン」細胞		
「AST」細胞		

表 一 百 第

第二十九例 永瀬 脚氣

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	1060
小淋巴球	注射後	1000
大淋巴球	一時間	1180
大單核細胞	二時間	1090
移行型		
中性多核白血球		
「エオチン」細胞		
「AST」細胞		

表 二 百 第

第三十例 津梅 脚氣

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	700
小淋巴球	注射後	1300
大淋巴球	一時間	890
大單核細胞	二時間	880
移行型		
中性多核白血球		
「エオチン」細胞		
「AST」細胞		

表 三 百 第

表五百第

白血球種類	時間		注射前	三十分後	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			四〇〇〇	五七〇〇	八〇〇〇	六四〇〇
小淋巴球			二九・八%	三〇・六%	三一・一%	三三・三%
大淋巴球			三・八	三・三	三・七	四・一
大單核細胞			二・五	三・四	二・八	三・〇
移行型			三・一	一・七	二・五	三・三
中性多核白血球			五五・二	五五・二	五四・五	五二・四
「エオチン」細胞			五・六	五・八	五・三	五・一
「アスト」細胞			〇	〇	〇・一	〇

表四百第

白血球種類	時間		注射前	三十分後	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			七三六〇	七六〇〇	一〇三〇〇	八四〇〇
小淋巴球			二六・一%	二八・〇%	二六・一%	二二・九%
大淋巴球			四・〇	三・六	三・四	三・三
大單核細胞			三・五	四・五	四・六	三・九
移行型			三・八	二・九	二・五	二・八
中性多核白血球			五八・六	五八・五	六〇・九	六五・〇
「エオチン」細胞			四・〇	二・五	二・五	三・一
「アスト」細胞			〇	〇	〇	〇

第三十一例 山口 脚氣

第三十二例 上房 脚氣

表七百第

白血球種類	時間		注射前	三十分後	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			七九〇〇	六五〇〇	七八〇〇	六四〇〇
小淋巴球			四・三%	四・五%	四・一%	三・八%
大淋巴球			九・二	八・三	八・一	八・〇
大單核細胞			一・六	一・四	一・五	一・七
移行型			一・五	一・一	〇・九	一・六
中性多核白血球			三七・九	三五・七	三三・九	四二・六
「エオチン」細胞			八・五	九・〇	一一・五	八・五
「アスト」細胞			〇	〇	〇	〇

表六百第

白血球種類	時間		注射前	三十分後	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			八四〇〇	九〇〇〇	一八〇〇〇	八七〇〇
小淋巴球			三・七%	三・六%	二・五%	三・九%
大淋巴球			三・一	二・七	三・一	二・八
大單核細胞			二・九	一・九	三・〇	三・七
移行型			二・七	一・三	二・一	二・二
中性多核白血球			六二・九	六六・五	六三・五	六四・三
「エオチン」細胞			六・六	五・〇	四・一	四・三
「アスト」細胞			〇・一	〇	〇・〇	〇

第三十三例 田邊 脚氣

第三十四例 松井 脚氣

戸出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

六九九

片出—腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第三十九例 馬場 結核性肋膜炎

白血球種類	時間		注射前	注射後三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			四二八〇	四六四〇	六八〇〇	六七六〇
小淋巴球			二七・三	二四・七	一七・一	一四・八
大淋巴球			六・〇	五・六	四・四	四・七
大單核細胞			二・三	二・三	三・一	三・七
移行型			一一・一	〇・七	〇・三	〇・五
中性多核白血球			六二・一	六三・三	七二・四	七四・一
「エオゲン」細胞			三・〇	三・七	二・四	一・九
「エスト」細胞			四・〇	七・〇	一・三	三・〇

表八百第

第四十例 山縣 結核性肋膜炎

白血球種類	時間		注射前	注射後三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			四二〇〇	三三四〇	三八八〇	五三〇〇
小淋巴球			二四・一	一三・三	三三・〇	二二・一
大淋巴球			八・〇	四・八	七・四	四・六
大單核細胞			一・三	一・一	一・〇	一・五
移行型			七・〇	〇・九	〇・六	〇・六
中性多核白血球			六四・六	六六・五	六六・三	七〇・八
「エオゲン」細胞			一・三	一・一	七・〇	一・一
「エスト」細胞			〇	三・〇	〇	三・〇

表九百第

第四十一例 古谷 胃潰瘍

白血球種類	時間		注射前	注射後三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			五四四〇	五四八〇	七三六〇	五〇〇〇
小淋巴球			三三・八	四六・三	二五・六	三〇・一
大淋巴球			七・四	七・七	四・〇	五・二
大單核細胞			二・三	二・六	一・五	〇・九
移行型			〇・九	一・七	〇・八	〇・一
中性多核白血球			四六・三	三三・七	五九・九	五二・二
「エオゲン」細胞			一〇・一	八・〇	八・八	七・五
「エスト」細胞			二・〇	〇	〇・四	〇

表十百第

第四十二例 和田 胃酸過多症

白血球種類	時間		注射前	注射後三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			七四四〇	一〇〇三〇	一〇八六〇	六八八〇
小淋巴球			一九・三	一七・四	一六・三	一六・八
大淋巴球			二・二	二・八	二・三	三・四
大單核細胞			一・三	二・八	二・六	三・九
移行型			二・一	二・三	二・四	三・四
中性多核白血球			四三・一	六二・二	六五・三	六三・九
「エオゲン」細胞			二・〇	三・三	二・二	八・六
「エスト」細胞			〇	〇	〇	〇

表一十百第

表三十百第

白血球種類	時間		注射前	注射後 三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			八〇〇〇	八三〇〇	一〇〇〇〇	九〇〇〇
小淋巴球			二〇・六%	一八・〇%	一〇・六%	一〇・六%
大淋巴球			二・三	二・三	二・〇	一・六
大單核細胞			二・三	二・八	二・二	二・五
移行型			二・二	一・六	〇・九	〇・七
中性多核白血球			六五・〇	六五・八	七六・三	七七・〇
「エオチン」細胞			七・五	九・二	七・五	七・三
「アスト」細胞			一・〇	一・〇	一・〇	一・〇

表二十百第

白血球種類	時間		注射前	注射後 三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			四二〇〇	五〇〇〇	五二〇〇	四六〇〇
小淋巴球			三三・四%	三三・四%	三〇・三%	三三・六%
大淋巴球			六・四	五・〇	六・〇	五・八
大單核細胞			四・三	三・一	三・八	三・六
移行型			二・〇	二・二	五・〇	五・三
中性多核白血球			五二・二	五二・一	五三・一	五二・五
「エオチン」細胞			二・三	二・一	二・五	一・二
「アスト」細胞			〇・五	一・〇	〇・四	〇

第四十三例 畑田 胃幽門狹窄症

第四十四例 藤井 胃酸過多症

表五十百第

白血球種類	時間		注射前	注射後 三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			五六〇〇	八七〇〇	七六四〇	六六四〇
小淋巴球			二二・一%	一五・三%	一四・七%	一五・五%
大淋巴球			二・五	二・二	一・九	二・七
大單核細胞			一・一	〇・九	〇・七	一・〇
移行型			〇・八	〇・七	〇・六	〇・八
中性多核白血球			七二・四	八〇・〇	八二・三	七九・二
「エオチン」細胞			二・一	〇・八	〇・八	〇・八
「アスト」細胞			〇	一・〇	〇	一・〇

表四十百第

白血球種類	時間		注射前	注射後 三十分	一時間	二時間
	種類	時間				
白血球數			七八〇〇	六七〇〇	九〇〇〇	六四〇〇
小淋巴球			二九・〇%	一九・〇%	一七・四%	二三・六%
大淋巴球			四・三	四・二	三・九	三・二
大單核細胞			二・九	三・四	四・一	三・五
移行型			二・一	四・二	四・七	四・三
中性多核白血球			四七・六	五二・三	五六・六	五三・八
「エオチン」細胞			一四・〇	一七・〇	二三・三	一一・六
「アスト」細胞			一・〇	〇	〇	〇

第四十八例 上畑 十二指腸蟲病

第五十一例 森田 十二指腸蟲病

戸出 腦下垂體製劑ガ脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

戸出—腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及ス影響

第五十四例 山田 萎縮腎

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	6370
小淋巴球	注射後	6000
大淋巴球	三十分後	29.0%
大單核細胞	一時間	26.0%
移行型	二時間	7.00%
中性多核白血球		65.70%
「エオチン」細胞		0
「マスト」細胞		0

表六十百第

第五十七例 岡田 慢性腎炎

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	5560
小淋巴球	注射後	6560
大淋巴球	三十分後	39.4%
大單核細胞	一時間	33.3%
移行型	二時間	27.6%
中性多核白血球		56.0%
「エオチン」細胞		0
「マスト」細胞		0

表七十百第

第六十三例 小谷 書瘧

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	6000
小淋巴球	注射後	7400
大淋巴球	三十分後	38.0%
大單核細胞	一時間	33.5%
移行型	二時間	33.8%
中性多核白血球		66.0%
「エオチン」細胞		0
「マスト」細胞		0

表八十百第

第六十四例 木澤 神經性漸進筋萎縮

白血球種類	時	
	種	間
白血球數	注射前	6500
小淋巴球	注射後	6300
大淋巴球	三十分後	28.1%
大單核細胞	一時間	19.3%
移行型	二時間	20.3%
中性多核白血球		52.0%
「エオチン」細胞		0
「マスト」細胞		0

表九十百第

表一十二百第

白血球種類	時間	時			
		注射前	三十分後	一時間	二時間
白血球數		5000	4400	5000	4960
小淋巴球		28.7%	28.7%	24.9%	19.9%
大淋巴球		7.3	6.4	6.4	5.3
大單核細胞		3.1	4.5	3.1	5.9
移行型		1.4	2.5	0.8	3.5
中性多核白血球		50.4	49.6	58.1	58.3
「エオチン」細胞		9.1	8.1	6.5	6.6
「アスト」細胞		1.0	1.0	1.0	0.5

表十二百第

白血球種類	時間	時			
		注射前	三十分後	一時間	二時間
白血球數		4800	5000	4900	5000
小淋巴球		36.5%	39.7%	33.6%	34.3%
大淋巴球		8.7	7.1	8.3	6.1
大單核細胞		3.7	2.4	3.1	3.5
移行型		3.1	1.4	2.6	3.1
中性多核白血球		46.3	48.2	50.7	51.7
「エオチン」細胞		1.5	0.9	1.6	1.0
「マスト」細胞		0.3	0.3	0.3	0.1

第六十六例 後藤 慢性脊髓前角炎

第六十七例 南方 脊髓微毒

表三十二百第

白血球種類	時間	時			
		注射前	三十分後	一時間	二時間
白血球數		10100	11400	11000	10500
小淋巴球		22.0%	19.8%	18.6%	18.8%
大淋巴球		2.5	2.3	3.0	2.9
大單核細胞		2.6	1.4	1.8	1.8
移行型		0.4	0.8	0.8	0.8
中性多核白血球		70.3	71.8	71.8	72.5
「エオチン」細胞		4.3	3.7	2.8	3.1
「アスト」細胞		1.0	1.0	1.0	1.0

表二十二百第

白血球種類	時間	時			
		注射前	三十分後	一時間	二時間
白血球數		7800	9600	9600	9000
小淋巴球		33.6%	25.0%	26.0%	26.2%
大淋巴球		3.0	3.8	4.4	4.4
大單核細胞		2.2	2.8	2.8	2.8
移行型		1.7	1.3	1.3	1.3
中性多核白血球		58.8	56.3	57.6	57.6
「エオチン」細胞		1.1	0.6	0.6	0.6
「マスト」細胞		0.6	0.1	0.1	0.1

第七十例 前田 脊髓癆

第七十一例 北村 脊髓癆

戸出一腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及メ影響

七〇三

第七十八例 上中 進行性麻痺

表四十二百第

白血球種類	時		注射前	注射後 三十分	一時間	二時間
	間	間				
白血球數			六〇〇%	六〇〇%	五〇〇%	六〇〇%
小淋巴球			一七・四	二一・一	一五・七	一八・〇
大淋巴球			一・七	〇・七	一・四	一・九
大單核細胞			一・三	一・三	二・三	一・七
移行型			一・七	一・六	一・六	一・二
中性多核白血球			七五・六	八四・六	六六・三	七六・二
「エオヂン」細胞			二・三	〇・七	〇・七	一・〇
「アシト」細胞			〇	〇	〇	〇

ハ増加後減少シ、一例ハ變化ナシ。即淋巴細胞ト中性多核白血球トハ反對ノ状態ヲ示シ前者ハ減少シ後者ハ増加ス。而シテ其約半數ニ於テハ注射後一時間以内ニ淋巴細胞却ツテ増加シ中性多核白血球ノ減少スルヲ見ル。「エオヂン」嗜好白血球ハ四例ノ増加セルモノヲ除キ他ハ皆比較的減少ヲ見タリ。此減少ハ淋巴細胞及中性多核白血球ノ増減トノ關係少ナシ。大單核細胞及移行型ハ八例ニ於テ變化ナク、十五例ハ注射後二時間ニ於テ増加シ、十二例ニ其時減少セルヲ見タリ。

各種白血球ノ絶對數ニ於テモ大體同一ノ關係ヲ認メ得ベシ。併シ疾病ノ種類ニ就テハ一定ノ關係ヲ見ル能ハザリキ。此白血球像ノ變化ハ「ピツイトリン」ト「アドレナリン」ト著シク類似シタルハ興味多ク、尙ホ研究ノ餘地ヲ有ス。

以上三十五例ノ検査ヲ通覽スルニ、三十二例(九一・四%)ニ於テ注射後白血球ノ増加ヲ來セリ。内七例ハ一時減少セルモ後増加シタリ。唯三例ニ注射後二時間内ニ其減少ヲ見タルモ例外トスベシ。「リポチストロファイ」ノ如キハ其増加一萬以上ニ及ビタリ。各種白血球中淋巴細胞ハ三十一例(八八・六%)ニ於テ比較的減少ヲ認メ内十四例ハ一時増加シテ後減少セリ。三例ハ二時間内ニ於テ常ニ増加シ一例ハ初メ減少シ後増加セルモ例外トスベシ。中性多核白血球ハ三十一例ニ於テ比較的増加ヲ來セリ。内十六例ハ初メ減少シ後増加セリ。二例ハ減少シ、一例

四、結 論

以上敘述セル臨牀實驗ヲ基礎トシ之ヲ結論スレバ次ノ如シ。

一、「ピツイトリン」皮下注射ハ皮膚蒼白、排便感、惡心、腹痛、排尿感、不整呼吸、不整脈、溫感、發汗、睡眠感、頭痛、稀ニハ口唇及肩部腓腸部等ニ疼痛性索引性異狀感竝ニ顫震ヲ起サシム。

二、「ピツイトリン」皮下注射ハ一般ニ脈搏ヲ減少セシメ、時ニ逆反應ヲ來ス。逆反應ハ心臟ニ變化ノ存スル疾患、羸瘦又ハ神經質ノ患者等ニ見ラル。

三、「ピツイトリン」皮下注射ハ一般ニ血壓ヲ上昇セシメ、心臟及血管ニ作用スル結果トシテ最高血壓ノミナラズ最低血壓ヲモ強ク上昇セシメ而シテ脈壓ノ減少ヲ來ス。血壓ニ於テモ亦逆反應ヲ認メ、最高血壓下降スル場合少ナカラズ。最低血壓ハカ、ル時ニモ上昇スル事多シ。

四、「ピツイトリン」皮下注射ハ「アドレナリン」皮下注射ト一定ノ關係ヲ有シ、脈搏ガ「ピツイトリン」ニ依リ強ク減少スルモノハ「アドレナリン」ニ依リ著シク増加スルモノ多ク、血壓ニ於テハ「ピツイトリン」ニ強ク反應スルモノハ「アドレナリン」ニ弱ク「アドレナリン」ニ強ク反應スルモノハ「ピツイトリン」ニ弱ク反應スル傾ヲ有ス。然レ共「アトロピン」及「ピロカルピン」皮下注射反應ト「ピツイトリン」トハ一定ノ關係ヲ認メ得ズ。從ツテ植物神經系統機能検査法トシテハ「ピツイトリン」ノ價値少ナシ。

五、「ピツイトリン」皮下注射ハ糖尿及ビ蛋白尿ヲ來サシム。

六、「ピツイトリン」皮下注射ハ白血球ノ増加ヲ招來シ各種白血球中淋巴細胞ハ一般ニ減少シ中性多核白血球ハ増加ス。但シ約半數ニ於テ注射後一時間以内ニハ反對ノ現象ヲ呈シ、淋巴細胞却ツテ増加シ、中性多核白血球減少セリ。エオチン嗜好細胞ハ一般ニ減少ス。

(完)

戸出—腦下垂體製劑が脈搏血壓尿血液等ニ及メ影響

ヤ〇ク

稿ヲ終ルニ臨ミ、恩師島蘭教授ニ對シ謹ミテ感謝ノ意ヲ表ス。

(本論文ノ梗概ハ大正十一年四月日本內科學會總會ニ於テ報告セル所ナリ。)

Literatur.

- 1) Oliver and Schaefer; On the physiological action of extracts of Pituitary body and certain other glandularorgans. *J. of Physiol.* 1895, 18.
- 2) Schaefer u. Vincent; On the action of the extract of Pituitary body injected intravenously. *J. of Physiol.* 1895, 24.
- 3) Gyon; Die physiologischen Herzgifte. *Pflüger Arch. f. d. gesamm. Physiol.* 1898, 73.
- 6) Garnier u. Thaon; Action de l'hypophyse sur la pression arterielle et le rythme cardiaque. *Compt. rend de la societe' de biologie*, 1906, 60.
- 7) Pal; Über die gefässwirkung des Hypophysenextractes. *Wien. med. wochenschr.* 1909.
- 8) Cow Douglas; Some relation of Surviving arteries. *J. of Physiol.* 1911, 42.
- 9) Cleghorn; The action of animal extract etc. on the mammalian heart. *J. of Physiol.* 1899, 2.
- 10) Claude, Beaudouin, Porak; La Glycosurie hypophysaire chez l'homme et l'animal tuberculeux. *Compt. rend. soc. de Biol.* 1912, 78.
- 11) Klötz; Experimentelle Studien über die blutdrucksteigernde Wirkung des Pituitrius. *Arch. f. exp. path. u. pharm.* 1911, 65.
- 12) Bertelli, Fala u. Schweeger; Über die Wechselwirkung der Drüsen mit innerer Sekretion. III mit. *Zeitschr. f. Kl. med.* 1910, 71.
- 13) Bayer u. Peter; Zur Kenntnis des Neurochemismus der Hypophyse. *Arch. f. exp. path. u. pharm.* 1911, 64.
- 14) Pal; Über die Wirkung der Hypophysen extrakte auf die Magensaftausscheidung und die Drüsensekretion im allgemein. *Deutsch. med. Wochenschr.* 1916.
- 15) Magnus u. Schaefer; The action of Pituitary extracts upon the Kidney. *J. of Physiol.* 1901, 27.
- 16) Fala, Neuburgh u. Nobel; Über die Wechselwirkung der Drüsen mit innerer Sekretion. *Zeitschr. f. Kl. med.* 1910, 72.
- 17) Bauer; Zur Funktionsprüfung des Vegetativen Nervensystems. *Deutsch. Arch. f. Kl. med.* 1912.
- 18) 島蘭; 脚氣 日本內科學會雜誌 第七卷
- 19) 前川; レアトレンチノンノ脈搏及血壓ニ對スル逆反應ニ就テ 日新醫學 第十年
- 20) Fabris; Response of children to Pituitary test. *Ref. in J. of Amner. med. Assoc.* 1921, 77.
- 21) Frankl-Hochwart u. Fröhlich; Über die Wirkung des Pituitrius. *Wien. Kl. Wochenschr.* 1909

- 22) Cushing a. Goetsch ; Concerning the ecretion of the Infundibular lobe of the Pituitary body and its presence in the cerebrospinal fluid. Am. J. Physiol. 1907, 27.
- 23) 進井 ; 腦脊髄液ノ溶血素生成量ニシテツイトリソノ腦脊髄液ニ及ボス作用ニ就テ 日新醫學 第九年
- 24) 吳外五 ; 隨意筋緊張ノ二重支配附隨意筋營養及腫反射ト交感神經 東京醫學會雜誌 大正十年 35
- 25) 橋本 ; 體溫ニ關スル知見補遺 日新醫學 第五年
- 26) Fleischmann u. Döblin ; Über die nervöse Regulierung der Körpertemperatur insbesondere über die Rolle der Nebenniere. Zeitschr. f. Kl. med. 1913, 78.
- 27) Csepai ; Über Hypophysenerkrankungen, zugleich einige Beiträge zur functionellen Diagnostik der Polyglandulären Erkrankungen. Deutsch. Arch. f. Kl. med. 1914, 116.
- 28) Von den Velden ; Die Nierenwirkung von Hypophysenextrakten beim menschen. Berl. Kl. Wochenschr. 1913, 45.
- 29) Franchini ; Die Function der Hypophyse und die Wirkungen der Injektion ihres Extraktes bei Tieren. Berl. Kl. Wochenschr. 1910, 14-16.
- 30) Biedl ; Innere Sekretion. 1913.
- 31) Cushing ; The diseases of the pituitary body. 1912.
- 32) 篠田, 蝶良 ; 植物神経系統ニ循環障碍ニ關スル研究補遺 (脚氣患者治療及豫防試験成績報告中) 東京醫學會雜誌 大正十一年五月 36